

お経を忘れた和尚さん (長野県)

むかし、あるお寺に、わすれん坊の和尚さんがいました。

ある日、お葬式があつたので、和尚さんは、小僧さんを連れてお弔いに行きました。とちゅう、田んぼのあぜ道を通つているとき、和尚さんは、何やら踏んづけてしまいました。キユツと音がしたので、和尚さんは、

「あれ。かえるを踏んづけたな」といいました。

小僧さんは、あとから歩いていました。見ると、和尚さんが踏んづけたのはかえるではなくて、なすびでした。小僧さんは、おかしくて、

「なんだ。和尚さまは、なすびを踏んでかえるだといったぞ」と、ひとり笑いながらついて行きました。

さて、むこうの家に着いて、いよいよお経をあげるときになって、和尚さんは、お経を忘れてしまいました。いくら考えても思い出せません。「何だったかな。何だったかな」と考えているうちに、さつき、田んぼのあぜ道で、かえるを踏んだのを思い出しました。そこで、こんなふうに唱えました。

「かえるを踏んだら、キュウと鳴いた

かえるを踏んだら、キュウと鳴いた」

くりかえしくりかえし、お経の調子で唱えました。

後ろにすわっていた小僧さんは、和尚さんに付いてお経を唱えようとしたが、なんだか変です。よく聞いていると、和尚さんは「かえるを踏んだら、キュウと鳴いた」とやっているではありませんか。周りにいる人たちは何も気がつきません。小僧さんは、おかしくて、「おれも何か変わったやつを唱えよう。そうだ、田んぼのあぜ道で和尚さんが踏んだのは、あれはなすびだったぞ」と思いました。

そこで、小僧さんは、

「よくよく見ればなすびだった

よくよく見ればなすびだった」

といつて、かねをチーンとたたきました。

和尚さんと小僧さんは、

「かえるを踏んだら、キュウと鳴いた」

「よくよく見ればなすびだった」

チーン。

「かえるを踏んだら、キュウと鳴いた」

「よくよく見ればなすびだった」

チーン。

と、くりかえしくりかえし唱えましたとき。

おしまい

原話…『信濃昔話集』牧内武司著／山村書院／昭和14年

再話…村上郁◎